

令和元年6月1日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12894

研究課題名(和文)人文科学系アカデミックライティング引用表現指導のための基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research into teaching expressions for citation writing in academic Japanese in the Humanities

研究代表者

實平 雅夫 (SANEHIRA, MASAO)

神戸大学・国際教育総合センター・教授

研究者番号：30253701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人文科学系大学院において上級日本語学習者が抱える論文の引用表現における困難を軽減するため、文化心理学の手法と枠組みによる理論的研究と共に、人文科学系論文の解析と学習者の論文・レポートの日本語教育学的観点からの分析を行い、学習者の母語別、専門分野別の引用表現の傾向と特徴を明らかにした。

さらに、実効性の高い論文作成における引用表現の指導方法論の構築に向けて、大学院レベルの外国人留学生が質の高い人文科学系論文を作成するための手引きの試作を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育における従来のアカデミックライティング研究は、作文指導を主眼とし、一般的な論文の書き方に留まるものが多く、教材もそうした研究に沿った作りになっている。

それに対して、本研究では、引用表現の傾向と特徴を明らかにし、指導方法論の構築に向けた手引きの試作、さらに、日本語アカデミックライティング授業の開講、指導にあたるチューターの養成、組織的に指導する日本語アカデミックライティングラボやセンターのような体制の構築、に向けた示唆が得られた。

研究成果の概要(英文)：This research has clarified some of the characteristics and tendencies of citation expressions in specialist subjects, depending on the learners mother tongue. Together with carrying out theoretical research on the framework and methods in cultural psychology, for reducing the difficulties in using citation expressions by an increasing number of advanced learners of Japanese at the postgraduate level in humanities, I carried out an analyses of referencing in humanities literature and also examined theses and reports written by postgraduate students learning Japanese from the viewpoint of Japanese language education. Furthermore, I attempted to create a handbook on how to create high quality humanities theses by International students at postgraduate level, aiming at creating a teaching methodology for citation writing to make high level theses.

研究分野：日本語教育学、留学生教育学

キーワード：日本語教育 人文科学 アカデミックライティング 引用表現 ライティングラボ ライティングセンター

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、認知様式・コミュニケーション様式の文化差を研究する文化心理学が発達し、2003年にニズベットがそれまでの成果を一般読者向けの概説書として出版するに至った。しかしながら、文化心理学においても東洋が包括的、西洋が分析的とらえ方をするという大雑把な捉え方で出発しているため、東洋の諸文化によって細かい差異があることを明らかにすることが課題であった。対照修辞論と異なって、程度の差を示すことが可能な枠組みである。Masuda and Nisbett(2003)は日本人とアメリカ人の知覚処理が包括的対分析的という差異があるということを示し、これは東洋人は包括的、西洋人は分析的な捉え方をするという一般的な傾向に合致すると結論付けた。しかし Tajima and Duffield(to appear)はイギリス人、中国人、日本人に同様な実験をし、中国人とイギリス人が日本人と比べるとかなり近い傾向を示す結果を得た。主観性の度合いについて言語間の差異を調査した Uehara(2006)でも英語と中国語は主観性が低く、日本語が一番主観性が高く、韓国語は日本語ほどではないが、かなり主観性が高いという結果が得られていた。また、韓国の文化心理学者は、同じ韓国人でも西洋医学の学生は分析的で東洋医学の学生は包括的であるという結果を得ていた。

(2) 1966年のカプランによる対照修辞論の提唱以来、外国語としての英語教育の分野では説文について言語ごとの議論の運び方の癖が明らかにされてきた。日本語教育の分野においても、対照修辞論をベースに意見文の文章構造を分析した研究が一部に見られはしたが、実質的に論文指導にまで応用・発展させた研究は、専門分野に特化した論文指導を視野に入れた研究として「科学研究費補助金 基盤研究(C)『中国語母語話者に対する社会科学系専門日本語教育のための教材開発』(H15~H18、代表：五味政信、一橋大学留学生センター)」、「科学研究費補助金 基盤研究(C)『人文科学系アカデミックライティング指導のための基礎的研究』(H22~H24、代表：西光義弘、神戸大学人文学研究科)」がみられた。

2. 研究の目的

(1) カプランらの研究により、欧米型の引用表現の方法はある程度明らかにされてきた。しかし、日本や中国、韓国などの東洋諸国の引用表現については研究が不十分で、まだその傾向はつかめていない。これは類似した文化間の差異を表示することが対照修辞論では方法論的に不可能であるところから来ている。それに対して文化心理学では度合いを表すことが可能である。日本人・中国人・韓国人の引用表現の癖を明らかにすることによって、文化心理学の方法をさらに精密化するという成果が期待できる。さらには専門分野による差異も出せば更なる精密化が期待される。一方、言語類型論的研究において主観性の類型がある程度解明されてきた。本研究では、これらの研究を参考にその傾向が引用表現の仕方にも反映されていると予想し、それを具体的なデータ分析によって明らかにしたいと考えるに至った。

(2) 上級の日本語能力を有する外国人留学生が、人文科学系大学院において論文の引用表現にあたり抱えている困難を解消するための理論的枠組みを構築し、人文科学系論文における引用表現指導に関する手引き作成に向けた示唆を得ることを目的とした。日本語教育における従来のアカデミックライティング研究は、その多くが一般の作文指導を全般的な論文指導に応用したものであり、必ずしも専門分野に特化した引用表現指導を実現するに足るものではなかった。本研究では、特に人文科学系論文における引用表現の持つ特有性を解明し、それに基づいて留学生の母語の違いからくる引用表現の特徴・傾向を明らかにすることで、大学院レベルでのより効果的な引用指導につながる理論的枠組みの構築への示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 理論研究においては、人文科学系論文の理論的枠組みを構築するため、アカデミックライティング・ライティング・引用・論文をキーワードとして関連分野の学術書籍・学術論文・科研費報告書のデータベースを構築し、先行研究の整理として、英語教育、日本語教育関連の先行研究における問題点を抽出すると共に、文化心理学において開発された実験方法で利用できるものを探索し、主観性、断定度、書き手責任対読み手責任、抽象度、包括的対分析的などのパラメータを立て、それぞれのパラメータが具体的に表われる現象をデータによって明らかにすることによって全体的な傾向と個別的な傾向の関係を考察した。人文科学系論文の分析においては、歴史学、文学、社会学、心理学の各研究分野における論文の分析として、引用パターン等の論文構成に関わる基礎データを整理、分析すると共に、分析結果を検討し、引用表現指導につながるものを厳選した。

(2) データ解析においては、データ収集として、人文科学系の外国人留学生大学院生の論文、及び、日本語教育学関連の授業における課題、レポートを対象とした。その上で、日本語教育学的観点からデータ分析として、学習者の母語別、専門分野別に引用表現を分析し、論文作成に当たって留学生が困難に感じている事柄を明確化するために、その傾向と特徴とを明らかにすることにより、引用表現指導の方法論の構築を試みた。そこから、人文科学系論文における引用表現指導の手引きの作成に向けた知見を探った。

(3) 継続的かつ効果的な留学生の論文の質向上を目指して、留学生を指導するチューターの役割の充実、留学生に対する論文指導におけるポートフォリオの導入等の指導方法の検討及び試行などを通して、留学生と留学生を担当する国内外の各分野の指導教員、ティーチングアシスタント、チューター、インターンシップ等の指導体制の構築に関する知見を探った。

なお、研究期間を通して、理論研究とデータ分析研究との整合性を維持するため、両研究の分析結果の擦り合わせを行い、効果的な引用表現指導の方法論を確立するために検討した。研究で得られた知見は、関連する研究会及び国際学会において、意見交換等を行った。

4. 研究成果

(1) 従来の日本語教育におけるアカデミックライティング研究と言えば、作文指導を主眼とした研究が多く、また論文指導にまで視野を広げたものであっても、一般的な論文の書き方に留まっているものが多かった。実際に出版されている教材もそのような研究に沿った作りになっており、大学院レベルの学習者にとっては、その指導が論文を書く上で生かされきれていないというのが実態であった。外国人留学生に対するアンケートにおいて、大学院の専門教育を受ける段階にある日本語能力上級者であっても、論文やレポートを書くにあたっては、「引用の仕方が難しい」という意見が多く見られた。このような上級日本語学習者が抱える困難を軽減するため、本研究では人文科学系大学院と学内の日本語教育担当部局の双方で講義を担当している研究代表者が研究に取り組むことにより、人文科学系論文の解析と上級日本語学習者の論文・レポートのデータ分析を質の高いものにすることが可能となる。また、この体制をとることで、人文科学系の各専門分野の教育現場に即した問題を洗い出すと同時に、専門教育の前段階である初級から上級にいたる日本語教育の問題を抽出することが可能となり、基礎的な日本語教育から専門教育までを通して見ることによってはじめて得られる専門教育・日本語教育の双方に貢献できる成果が得られた。

(2) 対象とした人文科学系論文各分野(国文学・歴史学・社会学・言語学・心理学)における引用表現の特徴としては、先行研究と同様の結果が得られた。左の表は、一例として、調査対象とした論文の中で引用表現が多く見られる序論にあたる節の部分を示したものである。このような点から始めた調査を継続して文化心理学において開発された実験方法で利用できるものを探索しパラメータの設定を検討した結果、引用パターン等の論文構成に関わる基礎データに基づく引用表現のデータベースの構築への示唆が得られた。また、人文科学系論文の論述スタイル、また引用構成のスキルが明らかになることで、人文科学系大学院に所属する外国人留学生の論文指導において、質の向上が窺えた。

(3) 外国人留学生が論文執筆に当たって、分野別・母語別に抱える引用表現方法等の困難や問題点として、アンケートによれば、まず、該当分野における学術的知識の不足である。先行研究の把握の多寡は、共有されている知見の記述方法に影響を及ぼしている可能性がある。研究対象及び研究者の新旧の幅をまとめれば、傾向性をうかがうことができるため、個人として把握できる範囲に加えて、学会及び研究会活動を通してその把握の範囲が拡張する。研究者個人としてできることは、論文の多読、単に論文の主旨や結論等の内容の理解のみならず、どの箇所でのどのような内容をどのような表現で引用しているのかにも注目して読み込むこと重要であることを認識することが求められる。自らの学術分野だけではなく、特に研究の初期段階で他の学術分野の論文に接することで、自身の学術分野の論文の特徴が把握できるようになる。つまり、全体像を鳥瞰することによる各々の学術分野の特徴を把握する視点が重要である。その視点の涵養には、引用されている論文がどのようなものか、他の論文との違いは何か等、第三者に指摘してもらったり、対話

論文No	節の名称	頁	論文No	節の名称	頁
国文学 01	(節名なし)	1	社会学 11	1 「引こもり」当事者という主題	3-5
国文学 02	はじめに	17-23	社会学 12	1 はじめに—家族研究者は何を研究しているのか	3-4
国文学 03	はじめに	32-34	社会学 13	1 問題の所在	21
国文学 04	(節名なし)	1-3	社会学 14	1 はじめに	39-40
国文学 05	—	18-19	社会学 15	1 研究目的と分析枠組み	57-59
国文学 06	はじめに	35-36	社会学 16	1 本稿の目的	3-4
国文学 07	—先行研究と同様の存在	52-53	社会学 17	1 はじめに	19-20
国文学 08	—はじめに	15-16	社会学 18	1 はじめに	37-39
国文学 09	はじめに	28-29	社会学 19	1 はじめに—エスニックマイグレーションと記憶	55-57
国文学 10	—	43-47	社会学 20	1 はじめに	73-74
国文学 11	二、はじめに	1-2	言語学 01	1 はじめに	17-19
国文学 12	一、はじめに	12	言語学 02	1 はじめに	115-117
国文学 13	(節名なし)	22-23	言語学 03	1 序	41-43
国文学 14	一、はじめに	32-33	言語学 04	1 はじめに	107-109
国文学 15	序	1	言語学 05	1 はじめに	77-78
国文学 16	—出前山からの眺望	21-23	言語学 06	0 はじめに	45-52
国文学 17	(節名なし)	34-35	言語学 07	1 はじめに	115-117
国文学 18	はじめに	67	言語学 08	1 導入	77-81
国文学 19	はじめに	78	言語学 09	1 はじめに	1
国文学 20	はじめに	46	言語学 10	0 はじめに	43-44
歴史学 01	はじめに	1-3	言語学 11	1 はじめに	1-2
歴史学 02	はじめに	27-32	言語学 12	1 はじめに	16-18
歴史学 03	はじめに	1-3	言語学 13	1 はじめに	32
歴史学 04	はじめに	23-27	言語学 14	1 はじめに	47-48
歴史学 05	はじめに	14-15	言語学 15	1 序論	63-64
歴史学 06	はじめに	42-45	言語学 16	1 研究の目的と背景	79-80
歴史学 07	はじめに	1-2	言語学 17	1 はじめに	95
歴史学 08	はじめに	29-33	言語学 18	1 本稿の視点と課題	110-111
歴史学 09	はじめに	1-4	言語学 19	はじめに	1-2
歴史学 10	はじめに	28-31	言語学 20	1 問題の所在	16-19
歴史学 11	はじめに	1-3	心理学 01	(節名なし)	193-194
歴史学 12	はじめに	19-22	心理学 02	(節名なし)	333
歴史学 13	はじめに	1-2	心理学 03	(節名なし)	339-341
歴史学 14	はじめに	18-19	心理学 04	(節名なし)	348-349
歴史学 15	はじめに	1-2	心理学 05	(節名なし)	356
歴史学 16	はじめに	1-2	心理学 06	(節名なし)	364-367
歴史学 17	はじめに	17-18	心理学 07	(節名なし)	373-374
歴史学 18	はじめに	1-4	心理学 08	(節名なし)	381-382
歴史学 19	はじめに	20-22	心理学 09	(節名なし)	388-389
歴史学 20	はじめに—問題の所在	1-4	心理学 10	(節名なし)	397-398
社会学 01	1 問題の所在	554-555	心理学 11	(節名なし)	79-81
社会学 02	はじめに—学術的批判	570-573	心理学 12	はじめに	1-2
社会学 03	1 日本における森林管理思想と林業生産	2-3	心理学 13	(節名なし)	11-14
社会学 04	1 問題の所在	19-21	心理学 14	(節名なし)	23-25
社会学 05	1 はじめに	37-38	心理学 15	(節名なし)	33-35
社会学 06	1 はじめに	52-53	心理学 16	問題	97-99
社会学 07	1 問題設定	112-114	心理学 17	(節名なし)	109-112
社会学 08	1 問題目的方法	130-135	心理学 18	問題	119-121
社会学 09	1 本稿の目的	150-153	心理学 19	問題	131-133
社会学 10	1 目的と問題意識—なぜ今、朝鮮語なのか	168-169	心理学 20	問題	141-145

を繰り返し深めていったりすることによって引用内容や引用表現の適切性を認識できるようになる。

次に、間接引用か直接引用かの選択である。単に引用の分量、その内容や箇所によって決まる訳ではないため、やはりそれまでに読み込んだ論文から得られた経験知とでも表現できそうな感覚を基準に選択していることが窺えた。先行研究の叙述は、例えば「先行研究の知見に言及する」「先行研究についての解釈を示す」「先行研究が不十分であることを示す」のような場合、複合的である場合が多く判断しづらかったという。例えば、「先行研究が不十分であることを示す」場合には、その前に知見が示されていることが多く、割り切った判断をすることが難しかったといい、それは翻って引用表現の執筆の困難性を指摘したものであろう。その克服のためには、単に引用表現の種別を増やす方向だけではなく、「共有されている知見」「研究の存在を示す」「先行研究の全体的な特徴を示す」「先行研究の知見に言及する」「先行研究についての解釈を示す」「先行研究が不十分であることを示す」という判断を段階に分けて、例えば「先行研究の内容がある程度示されているか否か」をステップ1または2、「示されている場合は論者の解釈が入っているか否か」をステップ3または4、そして「解釈は肯定的か否定的か」をステップ5または6と分けて「研究の内容が示されており、なおかつ論者の解釈が示されている。その解釈は肯定的である」というように2-3-5と複合的に判断すれば、間接引用表現の判断及びその活用に資する可能性が大きい。

さらに、間接引用表現の習得である。引用箇所の取捨選択、引用する論文内容を理解した上で間接引用に依りながら自分の表現に置換しつつ論を立てることが難しいのである。引用にあたっては、都合のいい箇所だけを引用してしまっていないか気を遣う、また、引用する論文の全体像を把握しているかどうか、さらに、自分の表現でまとめたり、言葉を置き換えたりする際にその表現がふさわしいかどうか、不安になるという。特に、間接引用の場合に括弧で括らないため、引用する論文にある言葉を使うことが盗用にならないか不安であるという。

以上から、これまで曖昧だった留学生担当チューターの役割も明確になり、教員の外国人留学生指導の負担が大幅に軽減されるであろうことが窺えた。

(4) 日本人学生と外国人留学生の論文の論理展開・論理構成の違いから来る引用表現の違いである。まず、留学生にとっては、日本人学生の知識を認識する過程で、それが一般知識であるのか、あるいは自分の学術分野の知識であるのか、という判断が困難であることが多く見られた。それに対しては、最初はたとえ短い文章であっても自分が書いたものを誰かに読んでもらう機会が必要であるが、現状は同じ分野の研究仲間に委ねることが多く、組織的に対応可能な制度の創造が望まれる。

次に、引用表現の習得である。どこから引用したのか、誰のものを引用したのかの明示といった基本的な事項の学習から始まって、間接引用の部分の言い換えや要約、間接引用中の直接引用、自分の主張と先行研究の区別といった間接引用の意味の理解が必要である。自分の主張を直接述べるのではなく先行研究に語ってもらうという理解もある。留学生にはそれが叙述の中に組み込まれることにより理解しにくくなると感じることもあるようである。

さらに、間接引用に関する不安の克服である。論文の多読、それから、作文以外にも日本語アカデミックライティングの授業の必要性が述べられた。例えば、論文の読解では、上記でも触れたように、自分の論文を異なる学術分野の学生にも読んでもらいコメントをもらうこれを繰り返すことにより、書き手としての成長を促すことにつながる。例えば、ライティングセンターの創設により、留学生のみならず日本人学生をも対象として、留学生と日本人学生、留学生と留学生、日本人学生と日本人学生というペアを組んで論文について検討する場の創出が可能になる。そうすることにより、論文の多読、執筆の機会の増加が図られ、引用表現にあってもその習得が促進されよう。論文の多読、執筆の機会の増加は、必然的に先行文献の解釈のみならず関連文献のリサーチにつながる。

(5) 人文科学系論文の引用表現指導方法論構築の試みである。研究の過程で、引用表現の検証に加えて、日本語教育における指導がより重要ではないかという示唆が得られたため、日本語教育における人文科学系アカデミックライティング引用表現の指導に焦点を当てた。

まず、人文科学系論文における引用表現の持つ特有性を可能な限り解明し、それに基づいて外国人留学生の母語の違いからくる引用表現の特徴・傾向を明らかにしたことで、大学院レベルでのより効果的な引用指導につながる理論的枠組みを構築し、人文科学系論文引用表現指導に関する手引きの試作を試みた。

さらに、留学生の論文の継続的な質向上を目的として、チューターの役割の充実、留学生に対する論文指導におけるポートフォリオの導入等の指導方法の検討及び試行などを継続して、留学生を担当する国内外の各分野の指導教員、ティーチングアシスタント、チューター、インターンシップに対する貢献をさらに図った結果、組織的に日本語アカデミックライティングを指導する体制（アカデミックライティングラボ）の構築に向けた示唆が得られた。

今後は、その体制の構築を目的とした応用的研究と共に、作成された人文科学系論文における引用表現指導の手引きを基に指導された留学生が、その後、どのような論文を書くに至ったかの調査研究を課題とする。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

實平 雅夫、人文科学系アカデミックライティング引用表現指導について(On the teaching of citation writing for academic Japanese in the Humanities) 15th EAJIS International Conference (第21回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム) 2017年

實平 雅夫、・木曾美耶子、大学間連携による海外日本語教育インターンシップ、International Conference of Japanese Language Education ICJLE (日本語教育国際研究大会) 2016年

〔その他〕

ホームページ等

<http://g-navi.jp/index.html>

https://kym-syllabus.ofc.kobe-u.ac.jp/campusy/campusquare.do?_flowExecutionKey=_c846620F6-7091-036B-01A3-A4278D090768_kDAC45CB9-B0E2-6B24-AC69-3D1B456B58E8

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。